

書き言葉に現れるア系の指示語について — 日本語・韓国語学習者の作文を資料に —

About Demonstratives "a-series" in Written Sentences: Based on the Compositions by Japanese and Korean Languages Learners

金井勇人ⁱ・河正一ⁱⁱ

KANAI Hayato・Ha Jeongil

(要旨)

本稿は、書き言葉（作文）に現れるア系の指示語について、日本語母語話者による韓国語作文と、韓国語母語話者による日本語作文を資料として、その特徴を分析するものである。ア系の指示語は話し手と聞き手との共有情報をマークするので、基本的には書き言葉には現れない。それは書き手と読み手とが（作文執筆以前から）情報を共有しているということが、原理的にはあり得ないからである。しかし、実際に書かれた作文を調査すると、数は多くないものの、作文においてもア系が現れることが分かる。本稿の分析によると、このタイプのア系は「擬似的な共有知識」を指すものである。また韓国語では基本的に、日本語のソ系（前方照応）とア系（記憶指示）の区別がなく、どちらにもコ系が対応する。そのため韓国語母語話者にとっては、「擬似的な共有知識」を前方照応と区別することが難しく、適切な箇所「擬似的な共有知識」を指すア系を使えない傾向が強い、ということが分かった。

キーワード：指示語、日韓対照、第二言語習得、誤用分析、作文に現れるア系、擬似的な共有知識

1. はじめに

日本語の指示語は「コ・ソ・ア」の3系列から成る。また、韓国語の指示語も「이・그・저」の3系列から成る。この両言語の指示語は、基本的にはコと이、ソと그、アと저が対応している。

しかしもちろん、細部を見れば異なる部分が存在する。特に第二言語習得において問題となるのは、文脈指示（非現場指示）におけるソと그、アと저の異同についてである。

ア系の指示語は、話し言葉において話し手と聞き手の共有知識を指す。久野（1973）は以下のように述べている。

- (1) アー系列。その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にみに用いられる。（久野 1973:185）

書き言葉（作文）においては、書き手と読み手の共有知識というものは、原理的に成立し得ないので、基

ⁱ 埼玉大学 人文社会科学部研究科／日本語教育センター 准教授

ⁱⁱ 高崎経済大学 地域政策学部 非常勤講師

本的にはア系の指示語は登場しない。

しかしながら、書き手が自身の思い出を語る場合などに、書き言葉（作文）であるにもかかわらず、ア系の指示語が登場することがある。このようなア系はどのように扱うべきであろうか。

この問題について本稿では、日本語母語話者による韓国語作文、および韓国語母語話者による日本語作文を資料とし、分析を行う。

2. 問題の所在

まず、日本語と韓国語の指示語の体系について概観しておきたい。

日本語は3系列、韓国語も3系列で、体系上はコと이、ソと그、アと저が対応している。しかしながら文脈指示（非現場指示）ではコと이は対応するものの、ソアと그저の対応は崩れてしまう。その理由は、韓国語の記憶指示は、저ではなく、前方照応と同様の그を用いるからである。^{iii iv} 박선희 (2008) では、韓国語教育における指示語の教授法のポイントについて、以下のように述べられている。

- (2) 화시적 지시에서 가능한 지시어의 목록은 ‘이’, ‘그’, ‘저’ 의 3 계열인데 문맥적 지시와 상념적 지시에서 ‘이’ 와 ‘그’ 가 쓰이고 ‘저’ 는 쓰일 수 없다는 점을 상기시킨다.

(박선희 2008:372)

話時的指示（＝現場指示）として使用できる指示語が이、그、저の3系列である一方、文脈的指示

（＝先行照応）と想念的指示（＝記憶指示）では、이と그は使用され得るが、저は使用できない、という点を想起させる（ことが重要である）。（日本語訳・（ ）内の補足・傍点は引用者による）

つまり、文脈指示（非現場指示）においては、日本語のコソアの3系列に対応する韓国語の指示語は、이と그の2系列なのである。各々の対応は次表のようになっている。

（表1）

	現場指示			文脈指示（非現場指示）		
	近称	中称	遠称	前/後方照応	前方照応	記憶指示
日本語	コ	ソ	ア	コ	ソ	ア
韓国語	이	그	저	이	그	

ⁱⁱⁱ 金（2006:108）は「あの輝かしい百済の文化！」のような「百科事典的知識であり、具体的には歴史上有名な人物や文化遺産に関する知識」である場合には저で指せる、と述べている。このような（記憶指示）用法は特別であると捉え、今回の考察では対象としない。

^{iv} 모리모토가쓰히코（2009:113）は、韓国語における想念的指示（記憶指示）に그系が用いられ、日本語ではア系が用いられる理由について、想念（記憶）を指示する韓国語の発話是对立的領域で行われる一方、日本語では融合的領域で行われるから、すなわち韓国語母語話者は想念（記憶）を聞き手の領域として、日本語母語話者は話し手・聞き手から等距離の領域として認識するから、と述べている。しかし韓国語では独り言においても、記憶指示に그系が用いられることから、この主張には首肯しがたい。なぜ、3系列の指示詞を有する韓国語の記憶指示において、遠称（저系）ではなく、中称（그系）が用いられるのか。筆者たちの今後の課題としたい。

以下は、韓国語を学習している日本語母語話者が書いた韓国語文であるが、前方照応の「その」に、コ系(그/거기)を対応させている。

(3) ^{近くの 道路 は 箱根駅伝の コースです 毎年 お正月 には 私 も その 道路 に 応援 しに 行きます}
가까운 도로는 하코네역전코스예요. 매년 정월에는 저도 그 도로에 응원하러 가요.

(初級／私の生まれた町)^v

(4) ^{私は 山口 で 生まれ 小学校 一年生 まで そこで 住んでいました}
저는 야미구치에서 태어나서 초등학교 일년생까지 거기서 살았습니다. (上級／自己紹介)

このように、韓国語作文においては特に問題は生じ得ないのだが、問題は逆のパターンである。すなわち、韓国語母語話者が日本語作文を書くときに、ソ系とア系の指示語の両方が登場し得るのである。

(3)' 近くの道路は箱根駅伝のコースです。毎年お正月には私もその/*あの道路へ応援に行きます。

(4)' 私は山口で生まれ、小学校1年生までそこ/*あそこに住んでいました。

(3)')(4)'のア系は誤用であるが、日本語のア系について熟知していない韓国語話者は、単に体系上の対応に頼ってしまい、ソ系かア系かで迷ってしまう（そして誤ってア系を選ぶ）ことが少なからず見られる（金井(2011,2015) 参照）。^{vi}

このア系が誤用であるのは、(3)')(4)'の読み手が「近くの道路」「山口」を共有知識として持っていないからである。このような問題を回避するにあたり、書き言葉（作文）においてはア系を使用しないというストラテジーを、学習者が採用することがあり得る。そうすることによって、確かにこの種の誤用を防ぐことができるだろう。

実際、書き言葉（作文）では基本的にはア系は現れない。したがってこのストラテジー自体が、日本語作文において大変有効なものであることは疑う余地はない。しかしながら韓国語作文の執筆者本人による日本語訳を確認したところ、数は多くないものの、ア系も現れ得ることが分かった。

3. 分析

3-1 韓国語作文について

本稿の分析に際しては、筆者たちが作成している韓国語作文コーパスを利用した。その（本稿執筆の時点における）概要を以下に示す。^{vii}

^v 本稿で取り上げる例文は、本稿の筆者たちが作成している「韓国語作文コーパス」（後述）から採集した。作文末に（執筆者の韓国語レベル／作文の題名）を記す。

^{vi} この誤用について迫田（1996:73）は「母語の違いにかかわらず、最も頻度の高い誤用パターンはソ系を使用すべき場合にア系を使用する「ソーア」の誤用であり、習得が進んでもあまり減少しなかった」と述べている。また迫田（1997:68）は「日本語のア系指示詞の領域において中称のコ系が多用され、韓国語の文脈指示用法ではコ系の汎用性が高いと言える」と述べている。

^{vii} この韓国語作文コーパスは、もちろん、本分析のためだけに、あるいは指示語の分析のためだけに作成しているのではなく、作文に係わるあらゆる文法項目の対照分析に資することを期すものである。

【韓国語作文コーパスの概要】

(5) 執筆者の属性・内訳

- ・韓国語を学習している日本語母語話者
- ・レベル … 初級 12 名、中級 6 名、上級 4 名^{viii}

(6) テーマの内訳

- ・自己紹介 16 本 ・私の家族 12 本 ・私の生まれた町 13 本
- ・私の好きな人 4 本 ・私の思い出 5 本 ・その他 7 本

(7) 合計 57 本

- ・1 名につき 1 本～数本の韓国語作文を書いてもらった。
- ・それぞれの韓国語作文について、執筆者本人に日本語訳を付けてもらった。

これらの作文（日本語訳）のうち、ア系の指示語が現れるのは、全部で4本であった。本稿では、そのうちの2本を取り上げる。

3-2 調査と分析

以下の韓国語作文で下線を引いた部分にはコ系が用いられているが、このコ系は、同一執筆者による日本語訳によると、（日本語の）ア系のつもりで書かれたものである。

- (8) 아버지 ^父는 벌써 ^は 돌아가셨^{すでに}지만 어머니가 ^母 건강할 ^が 때 그 공원을 ^{元気のうちに} 다시 ^{あの公園を} 방문하고 싶어요. ^{もう一度 尋ねてみたい}

（初級／私の生まれた町）

- (9) 그때 ^{あの時} 친구와 ^{友人と} 나누었던 ^{した} 이 ^{この} 이야기는 ^話 아직도 ^は 내 ^{まだ} 속에 ^{私の} 생생하게 ^{中に} 남아있다. ^{生々と残っている}

（上級／私の思い出）

(8)(9)では、書き手の記憶内にある「公園」「時」が、ア系によって指されている（記憶指示）。ここで（執筆者本人による）日本語訳の全文を確認しておきたい。

- (8) ①私は横浜の海に面した町で生まれました。②ただ、幼稚園に入る前に引越しをしたので、あまり記憶がありません。③それでも覚えているのは、大きな公園が家から少し離れたところにあり、父によく連れて行って貰ったことです。④その公園はとても広くて原っぱのような公園でした。⑤そこで土管を寝かせてペンキを塗った遊具の中に入ったり、上に乗ったりして遊びました。⑥乗って立ち上がろうとして落ちて父を慌てさせた事もありました。⑦こうして思い出してみると、私は当時から無謀なところがあったようです。⑧この街を私が就職した後家族で訪れた事がありました。

^{viii} レベルの認定については、以下の2つの資格試験を基準とした。

韓国語能力試験：6～5 級＝上級、4～3 級＝中級、2～1 級＝初級

ハングル能力検定試験：1～2 級＝上級、準 2～3 級＝中級、4～5 級＝初級

この「上級／中級／初級」の認定は、本稿における便宜的なものである。ただし、韓国語能力試験は数字が大きいほど上級となる（ハングル能力検定試験と逆順）。また、無資格者は、受験するほど上達していないと見なし、初級に分類した。

⑨その当時住んでいたところは社宅だったので、近所の人はもちろん引越して、建物そのものが建て替わっていて、妹と私には馴染みのないところでした。⑩しかし、両親は大変なつかしそうにしていました。⑪父は既に他界しましたが、母が元気なうちにあの公園をもう一度訪ねてみたいと思います。

(9) ①最近SNSが普及したからかいつでもどこでも撮影会を始める人を目にする。②その光景を見る度、高校時代にある友達とした話を思い出す。

③入学式、修学旅行、誕生日、結婚式。④人生の大切な場面で写真を撮る人は少なくない。⑤人はなぜそういった場面で写真を撮りたがるのだろうか。⑥私は、その答えは思い出を写真に収め、半永久的なものにするためだと考えていた。⑦しかし、その友人は重要な場面であるほど写真を撮りたくないと言った。⑧写真を撮った瞬間、その大切な時間がただの撮影作業の時間になってしまうような気がするから、その時間の価値が落ちてしまうような気がするから嫌だと言った。⑨写真を撮っても、その瞬間の空気やその瞬間を共有する人の気持ちは収められない。⑩友人は言葉にはしなかったが、友人の話からはそのような考えが感じられた。

⑪その当時はひねくれた考えだと思っていたが、最近になって友人のその考えにも一理あると感じられることが増えた気もする。⑫あの時、友人としたこの話は今もまだ私の中に生々が残っている。

このとき読み手は、これらの記憶を共有していないのだから、久野（1973）によると、ア系は使えないはずである。しかし(8)′(9)′における「あの公園」「あの時」は、まったく自然である。^{ix}

このように、書き手が自らの郷愁に浸るような、いわば修辭的な文脈においては、書き言葉（作文）においてもア系が現れ得る、ということが分かる。これらア系が現れたのが「私の生まれた町」「私の思い出」というテーマの作文であるのは偶然ではない（本稿で取り上げられなかったア系が現れる2本の作文も「私の思い出」というテーマである）。

さて、この(8)(9)を韓国語で書く場合は、すべてコ系を選択すればよいのであり、原理的に問題は生じ得ない。問題は日本語で書く場合である。つまり、コ系はソ系とア系に対応するので2通りの選択肢がある、ということである。

先に見た「書き言葉（作文）ではア系は現れない」というストラテジーを順守すれば、これらの箇所ではソ系を選択することになる。しかし該当箇所ではソ系を選択すると、文脈的な繋がりが不自然となる。

(8)′ 父は既に他界しましたが、母が元気なうちに#その公園をもう一度訪ねてみたいと思います。

(9)′ #その時、友人としたこの話は今もまだ私の中に生々が残っている。

これらは書き言葉（作文）であるのに、なぜソ系にすると不自然になってしまうのだろうか。ここで注目したいのは、先行詞が現れる位置である。つまり「その～」が登場する箇所から先行詞までの「距離が遠い」のである。

(8)′の先行詞は「公園」であるが、「公園」に言及しているのは、第③文の「大きな公園が家から少し離れたところにあり」から、第⑥文の「(遊具に) 乗って立ち上がろうとして落ちて父を慌てさせた事もありまし

^{ix} 日本語母語話者8名に(8)′(9)′の全文（ただし該当箇所を「その／あの公園」「その／あの時」と記してある）を提示して、「その」か「あの」かを選んでもらったところ、8名全員が「あの」を選んだ。

た」までである。重要なことは、第⑦文から第⑩文まで「公園」の話題は登場せず、しかも過去の場面ではなく、現在の様子が語られていることである。そして「あの公園」が現れる⑪文において、再び「公園」に言及する、という構造をしている。

(9)も同様の構造である。先行詞「(友人の話を聞いた)とき」については、第⑦～⑩文で描写が行われ、第⑪文で別の話題(現在の心境)を挿入した後、第⑫文で再び言及する、という構造をしている。

この現象については、2つの解釈が考えられる。1つ目は消極的解釈(ソ系が選択されにくいこと)であり、もう1つは積極的解釈(ア系が選択されやすいこと)である。

まず1つ目の消極的解釈であるが、庵(2007)によると、ソ系(そのN)はテキスト的意味が付与されたものだという。したがって先行詞は「そのN」から近い距離になければならず、遠距離照応が不可能だという。^x すなわち、(8)・(9)においては、別の話題が入り込んで先行詞についての話題が中断されることから、該当箇所でのソ系が不自然となるのだと考えられる。

次に2つ目の積極的解釈である。ア系の指示語は通常、話し手と聞き手の共有知識をマークするために用いられる(久野1973)。

(10) 太郎「南与野駅に新しくできたレストラン、もう行った？」

花子「あ、あのレストランね。まだ行ってないんだ」

太郎「じゃ、今度、一緒に行こうよ」

一方、書き言葉(作文)では、書き手と読み手の共有知識というものは原理的に成立しないため、基本的にはア系が登場し得ない。

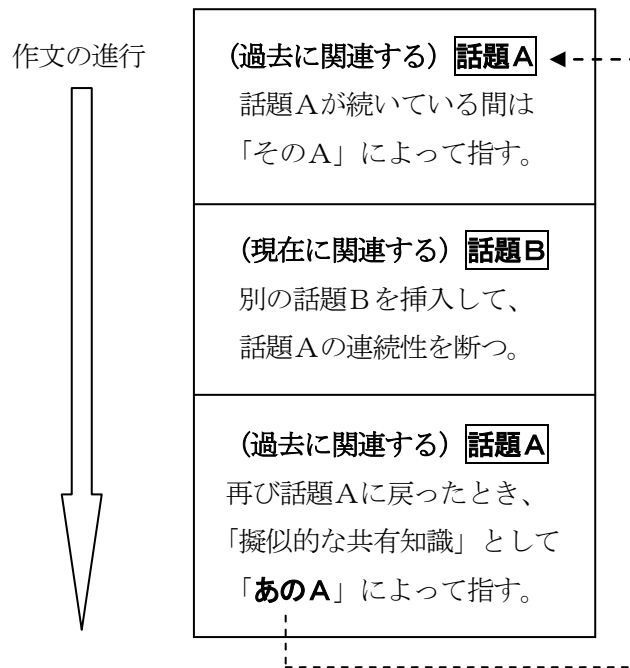
しかし、(8)・(9)は、一度「先行詞」についての話題が中断され、その後に再言及する、という構造となっている。このような仕掛けを施すことで、一種の「擬似的な共有知識」となるのだと考えられる(もちろん(10)のような真の共有知識ではない)。

^x 庵(2007)は、遠距離照応の「その」は、テキスト的意味を前文脈から受け継いで後続する名詞(町)に付与できないために不可能となる、ということを以下の例で実証している。

「私は帝政ロシアの皇女アナスタシア」。そう言い続けたアンナ・アンダーソンさんが、不遇のまま八十二歳で死んでもう八年以上たつ。イングリッド・バーグマン主演の映画『追想』のモデルにもなり、晩年は米国に住んだ。英紙サンデー・タイムズが先ごろ、ウラル地方の鉱山都市で見つかった十一体の遺骨について、最後の皇帝ニコライ二世と家族全員などであることが確実になったと報じた。遺骨に残る傷跡などが一家のものと一致したという。ところが最近になって、AP通信が「四女のアナスタシアとアレクセイ皇太子の遺骨は含まれていなかった」という米国の法医学者の分析結果を伝えた。英紙が本当なら、アンナさんは完全に偽物だし、APの報道通りなら「兵士に助けられ、脱出した」という数奇な話が多少とも真実味を帯びてくる。ロマノフ王朝の最期は、いまだになぞめいている。一家はこの(##その)町のパイチョフ館と呼ばれる屋敷に幽閉されていた。(庵2007:90)

この分析自体は「この」と「その」の選択を論じているものだが、「その」の遠距離照応が不可能であることは、「あの」と「その」の選択を論じる本稿にとっても、大変有益な示唆を与えてくれる。

(図1) 「擬似的な共有知識」をア系で指すときの構造



このときに注目したいのは、「あのA」によって指すときの先行詞は、再登場した話題Aの段落内（およびその周辺）ではなくて、話題Bが挿入される前に語られていた、初登場時の話題Aの段落内（およびその周辺）に存在する、ということである。このような構造を有するために、読み手は話題Aを「擬似的な共有知識」として認識することが可能となるのだと考えられる。

この構造は、本稿で実際に取り上げた2本の作文はもとより、(紙幅の都合により) 取り上げられなかった2本の作文にも見られるものである。^{xi}

作文において自身の「思い出」を語るとき、その思い出を擬似的に書き手と読み手の共有知識として扱えば、より魅力的な語り方をすることができるだろう。そして、その「擬似的な共有知識」を指すために、ア系が使用されるのだと考えられる。^{xii}

3-3 韓国語母語話者による使用の可否

今度は(8)'(9)'の日本語訳を、延べ17名の韓国語母語話者（日本語能力試験1級合格者15名、日本留学試験にて同水準2名）に依頼して、再び日本語に訳し直してもらった（もちろん該当箇所だけではなく、全文を訳してもらった）。問題となっているコ系をどのように訳したかを示すのが、次の表2である。

^{xi} ただし、図1の構造はあくまで典型例であり、派生的な構造（例えば先行詞が省略されている場合や、話題Bが現在のものでない場合など）も考えられ得る。どのような派生的な構造があり得るのかについての詳細は、今後の課題としたい。

^{xii} 黒田（1979）では、次のようなア系が論じられている。

「僕は大阪では山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくと、きっと何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられるよ」（黒田 1979:55、下線は引用者による）

ここでの趣旨は、指示対象が（聞き手との共有知識か否かにかかわらず）話し手の記憶内に存在することだけが、ア系の本質的な使用条件だということである。一見すると、本稿で対象としているア系と似ているが、しかし黒田（1979）のア系は「擬似的な共有知識」を指すのではない。むしろ、共有知識であることを積極的に否定した上で、それを聞き手が知らないことを非難する、というニュアンスが（多少なりとも）ある。したがって、本稿の分析対象である「擬似的な共有知識を指すア系」とは異なるタイプである。

(表 2)

	ソ	ア	言い換え	省略	合計
あの 公園 그 공원	12 「その公園」	2 「あの公園」	0	1 「 ϕ 公園」	15
あの 時 그 때	8 「その時」	3 「あの時」	2 「当時」など	0	13

言い換えと省略については、ここでの分析対象から外すとして、一見して気づくのは、ソ系を選んだ被験者（韓国語母語話者）が有意に多い、ということである。このことから本稿の調査の結論として、次のことが言えるだろう。

- (11) 韓国語を母語とする日本語学習者の多くは、上級（超級）レベルになっても「擬似的な共有知識」を指すア系を習得していない。

ここに日韓の指示語の体系の差異から生まれる誤用のうち、従来、指摘されてきたもの——ソ系を使用すべき場合にア系を使用する「ソーア」の誤用（迫田 1996）——とは正反対のパターンの「ア系を使用すべき場合にソ系を使用する「ア→ソ」の誤用というものを指摘することができる。

4. おわりに

本稿では、以下のことを論じてきた。

- (12) 書き言葉（作文）においてもア系の指示語が登場し得る。
 (13) 書き言葉（作文）に現れるア系は「擬似的な共有知識」を指すア系と言える。
 (14) 韓国語を母語とする日本語学習者の多くは、上級（超級）レベルになっても「擬似的な共有知識」を指すア系を習得していない。

最後に、(14)について付記しておきたい。

まず、(14)のような事態が起こるのは、なぜなのだろうか。1つの仮説として「書き言葉（作文）においてはア系を使用しないという戦略」を学習者が採用しているから、ということが考えられる。

先述したように、書き言葉（作文）では、書き手と読み手の共有知識は「原理的に成立しない」のであるから、すべてをソ系にして問題がないはずである。このことから、ア系を使用しないという戦略を言わば順守し過ぎるために、この種の「ア→ソ」の誤用が生じ得るのだろう。

確かに、自身の「思い出」をより魅力的に語るための「擬似的な共有知識を指すア系」は、日本語母語話者は難なく使用するわけであるから、日本語学習者も、いつかは習得する必要に迫られると思われる。

しかしながら、日本語教育の視点からは、以下のような問いが想定される。

- ・そもそも指導する必要があるのか。
- ・どこまで指導するか（読めればよいのか、書けた方がよいのか）。
- ・いつ指導するか（比較的早い段階からか、それとも超級になってからか）。

といった諸問題が浮かび上がってくるが、これについては今後の課題としたい。

参考文献

1. 庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
2. 金井勇人・金善花・ジョセッププラウイタ（2011）「日本語と諸言語の指示語の対照についてーインドネシア語・韓国語・中国語とー」『埼玉大学国際交流センター紀要』5, pp.17-34
3. 金井勇人（2015）「韓国語話者と中国語話者の指示詞「ソ⇔ア」の誤用ー「共有知識とは何か」という観点からー」『埼玉大学日本語教育センター紀要』9, pp.3-15
4. 金善美（2006）『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』風間書房
5. 迫田久美子（1996）「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程ー対話調査による縦断的研究に基づいてー」『日本語教育』89, pp.64-75
6. 迫田久美子（1997）「中国語話者における指示詞コソアの言語転移」『広島大学日本語教育学科紀要』7, pp.63-72
7. 久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
8. 黒田成幸（1979）「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』pp.41-59, くろしお出版
9. 박선희（2008）「학습자의 언어 인식 조성을 통한 한국어 지시어 교수 방안」『외국어 교육』15-3, pp.359-386, 한국외국어교육학회
10. 모리모토가츠히고（2009）「한, 일 양국어의 지시어에 관한 대조 연구 - 기능과 용법을 중심으로 -」『한국어 의미학』30, pp.89-117, 한국어의미학회